

田尻地区ほ場整備関連遺跡調査成果発表会

田尻西部地区の発掘調査成果

2016.2.20

宮城県教育委員会

宮城県教育委員会では、ほ場整備事業により遺跡に影響が及ぶ場所を対象に調査を行ってきました。平成19～22年度は北小松遺跡とその西側の遺跡群、平成23～27年度は団子山西遺跡を調査しました。調査終了に合わせ、これまでの調査成果をご報告いたします。

①北小松遺跡ほか

◆湖沼のほとりの縄文集落群

遺跡が立地するのは東西から延びる丘陵上で、縄文時代には周囲に湖沼や湿地が広がり、晩期(3000～2500年前)には大小の集落が点在していました。

最も規模が大きいのは居住域①の集落で、丘陵中央の平坦面に広場があり、この広場を囲むように住居や倉庫とみられる多数の建物、および焚火跡が見つかりました。周囲の丘陵斜面には墓域が形成され、また集落を囲っていたとみられる柵や塀の一部、ゴミ捨て場(遺物包含層)も見つかりました。

点在する小集落の大半は同時期で、当時の土地利用方法や日常生活の様子を解明する重要な手掛かりが得られました。

◆土器を被せた埋葬人骨

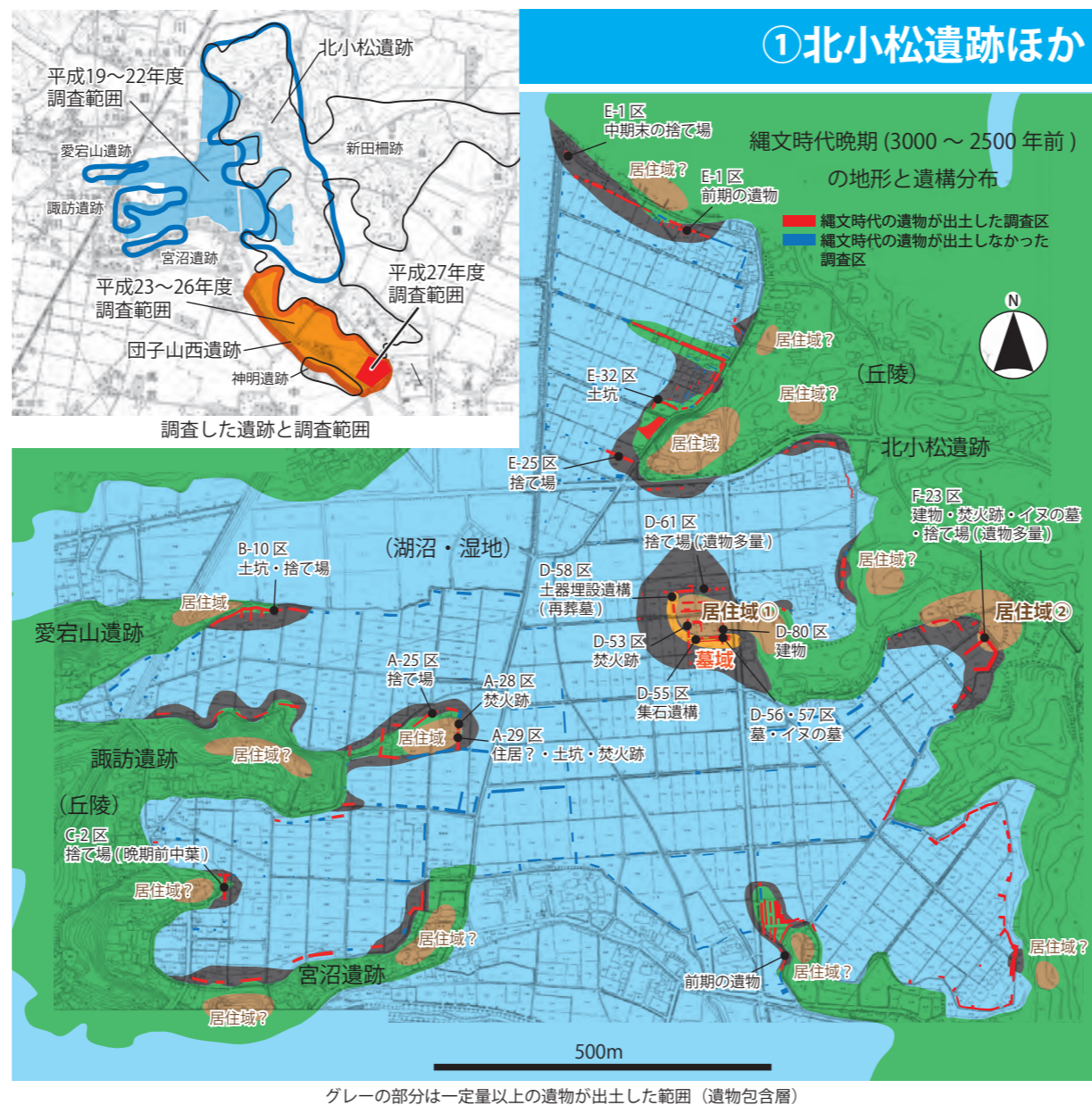
墓域では27基の墓が見つかりました。人骨が残り、良好な全身骨格を検出したものもあります。いずれも手足を曲げた屈葬で、縄文土器を被葬者の頭や膝に被せたものと被せないものがみられます。土器の中に人骨の一部が入れられた再葬墓とみられる墓もあります。イヌの墓も見つかりました。さらに、域内に作られた集石遺構からは、石棒や独鈷石、土偶など祭祀に関わる遺物がまとめて出土しました。

◆貴重な出土品

本遺跡は有機物が残りやすい土壌環境のために、木製品や骨角器、動物の骨、貝殻、種子など通常は失われてしまうものが保存されていました。居住域①・②周辺の捨て場ではその内容が特に多量かつ多様です。これらの中には中空動物形土製品など類例の少ない遺物が含まれ、特に「サメ歯装着具」は日本列島初の出土例です。

◆遺跡の廃絶から現在

遺跡が廃絶した直後の弥生時代前期(約2500年前)、大規模な洪水が発生し、湖沼地帯は運ばれてきた大量の土砂により埋まりました。その後、湿地を経て乾地化し、現在では大部分が水田として利用されています。



グレーの部分は一定量以上の遺物が出土した範囲(遺物包含層)



◆墓域

大人の墓の中には頭部と脚部に大型の鉢が被せて埋葬されているのがみられた(左上)。男性で年齢は40歳前後かそれ以上。足元には赤色顔料が撒かれていた。子供の墓(右上)では鉢は被せておらず、傍らに独鈷石が副葬されていた。11歳ぐらいの女性とみられる(ともにD-56区)。

イヌの墓では1～3体の埋葬がみられた。写真(左下)は3匹一緒に埋葬されたもの(D-57区)。

集石遺構(右下)には石器や土器など1300点が集められており、石斧や石皿など実用的なもの、独鈷石、石棒などの非実用的なものが混在していた。

①北小松遺跡ほか ～湖沼のほとりの縄文遺跡群～

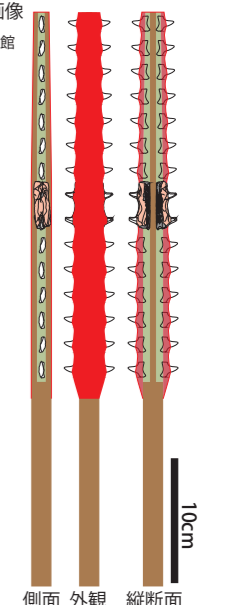
◆居住域

建物は長方形や5角形の柱配置をとる。左上の写真は居住域②の主な建物(青が建物)で、重複しており幾度も立て直されている。西側丘陵のA-29区では住居とみられる竪穴状遺構や貯蔵穴、焚き火跡が見つかり(左下)、B-10区では貯蔵穴に四脚付鉢、浅鉢、壺などの土器がまとめて捨てられていた(右下)。

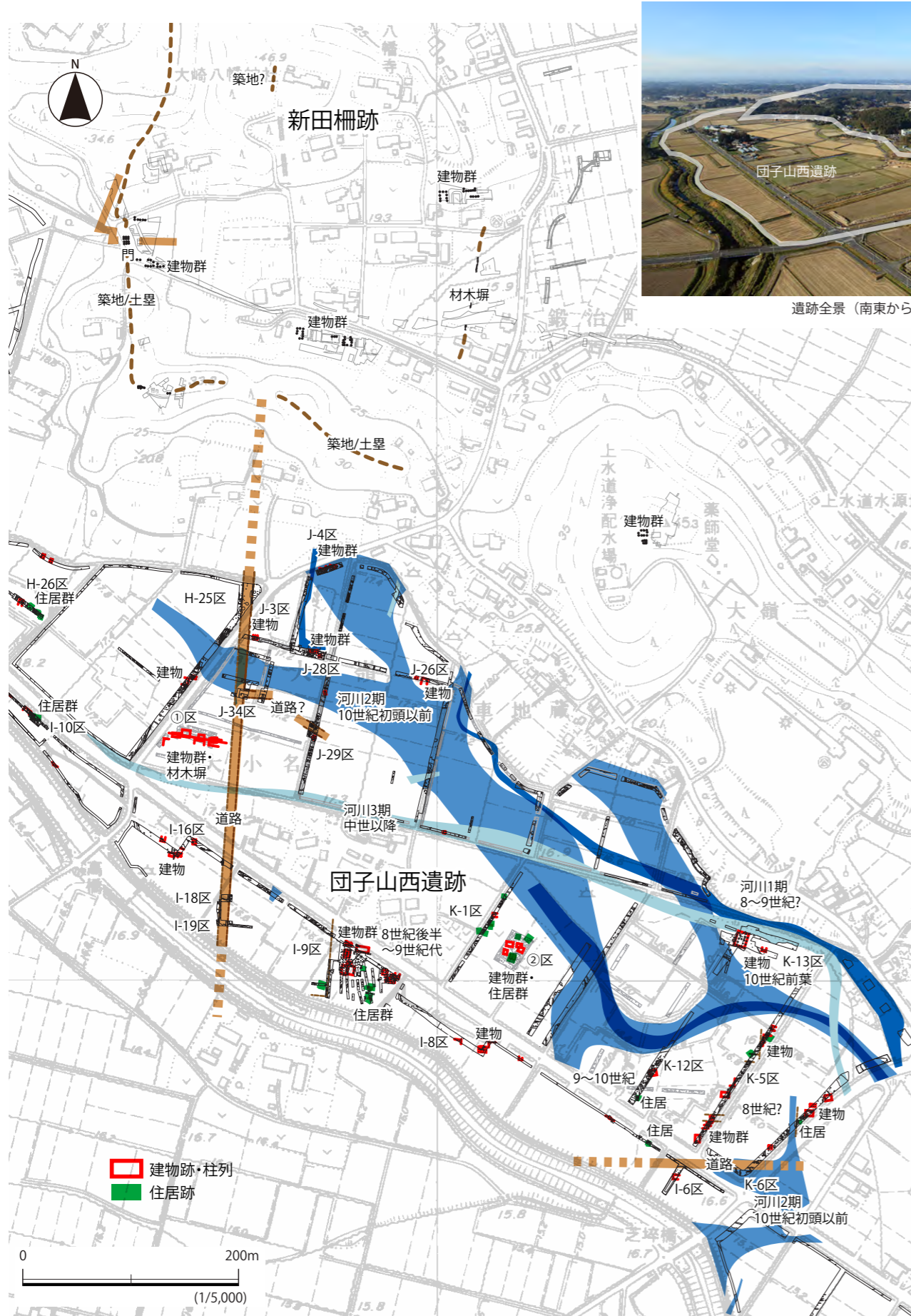


◆捨て場と遺物

遺物包含層には廃棄状況を留めた捨て場の状況を示す箇所がある。居住域①北のD-61区では厚さ約2mの遺物包含層から完形に近い土器などが多量に出土した(上段左)。亀を模したとみられる中空動物形土製品(上段右)や木胎漆器(赤漆を塗った木の器、中段左)、サメ歯装着具(中央、右下は復元図)など非常に珍しい遺物や、残滓として棄てられたシカやイノシシの骨(下段右)も見つかった。A-25区ではニワトコの実が集中して出土し加工後にまとめて捨てられたと考えられる(下段左)。



② 団子山西遺跡 ～見えてきた城柵南面の町並み～



遺跡全景（南東から）

道路跡▶

南北道路跡（上）は新田柵跡の中心とみられる方向へ延びる。K-6区で確認した東西方向の道路跡（下）は幅4.8mと前者より狭い。いずれも道路の両側溝を検出。これら以外ではJ-34区で南北道路の東側溝が東へ屈曲する状況が認められ、J-29区でも道路跡の遺構が見つかったが、いずれもその延長については現状では把握できておらず、今後詳しく見ていく必要がある。



▲建物跡群 I-9区の建物配置（左・白が建物跡、青が溝跡・上が北）。北側にある最も大きな東西方向の建物は長辺が11.5m。これらの中には大型の建物や床束を伴う建物、高床倉庫と考えられるものがある。これらは方向、柱筋をそろえ、計画的に配置されている。溝跡もこれらと方向を揃え直線的に延びる。右は今年度のK-5区で見つかった規模が類似するとみられる建物跡。



② 団子山西遺跡

◆直交する道路・区画

団子山西遺跡は、古代の城柵跡である新田柵跡の南に隣接する奈良・平安時代を中心とした遺跡で、掘立柱建物跡や竪穴住居跡などが広い範囲で見つかっています。昨年度までの調査で遺跡の西寄りのH-25区からI-19区にかけて幅7～9mの南北方向の道路跡が300m以上に渡って見つかり、新田柵跡と関わる南北方向の基幹道路の可能性が考えられてきました。今年度の調査ではK-6区からI-6区にかけて、これとほぼ直交する東西方向の道路跡が80m以上延びることが確認されました。また、これらと方向を揃えた直線的な溝跡も広い範囲で見つかり、遺跡内がこれらにより区画されていたと考えられます。

◆方向を揃えた建物群

遺跡内で見つかる建物は方向が北でやや東に傾くものを主体としています。これらは道路と方向が揃い、同時期のものと考えられます。密に分布する箇所が見られ、①・②区・I-9区が顕著で、特にI-9区では大型の建物や倉庫などが計画的に配置された建物群を形成しています。建物跡の詳細な時期はまだ明らかではありませんが、I-9区の建物群は8世紀後半～9世紀代とみられる一方、K-5区では出土物の大半が8世紀代とみられることなど、これら主体となる建物跡にも時期的変遷があることが想定されます。

また、遺跡の北部には、河川が時期ごとに流路を変えながら北西から南東へ蛇行して流れていたと考えられます。建物跡は特にI期河川（図中の濃い青）を避けて分布する様子が見えます。河川の影響を受けない遺跡南半部を中心に土地利用がなされたと考えられます。

◆10世紀の大型建物

10世紀初頭までに遺跡内には湿地が広がるようになり（河川2期）、上記の施設の多くは廃絶するとみられます。今年度の調査では、K-13区で10世紀前葉の大型の建物跡が見つかりました。湿地の埋没、乾地化後に建てられたものです。この時期ものとしては新田柵跡を含め周辺で初めて見つかった重要な施設で、この地域の変遷を考える上で重要な発見です。

◀大型の建物跡 10世紀前葉。南北13m、東西10.5m（左・上が北）。柱配置は南北・東西ともに4間で、南北の間隔が東西よりも長い。北西部の柱穴は新しい河川跡により失われている。西辺では中央の両横にも柱が設けられており、入り口にかかわる可能性がある。中央に東西方向の間仕切り、東西に底を持つ南北棟が想定される。一度建て替えられ、建て替え後の柱穴埋土には10世紀初頭に降下した火山灰を含む。主要な柱穴の規模・形態は一辺1～1.5mの方形を基調としており、残存していた柱材の直径は25cm（右上・柱穴を半分掘った状況）。底面に丸太材が敷き並べられ、その上に柱が設置されているものもみられる（右下）。